視覚言語の理解のための教材研究

―― 写真による教材の例 ――

福田　隆眞・山田　晃子*

On the Learning Material for Understanding about the Visual Language by Using Photographs

FUKUDA Takamasa and YAMADA Akiko*

(Received July 30, 2004)

キーワード：造形要素　視覚言語　写真　言葉

はじめに

美術教育の方法の一つとして視覚言語による学習がある。わが国では昭和初期の構成教育運動や造形主義による美術教育などがその始まりである。戦後はデザイン学習の発展にともない視覚言語による教育は造形文法として流布した。その後は視覚教育という観点からリテラシーの教育として捉えられている。

本稿では写真表現を用いて感覚的、触覚的な言葉も含めながら言葉と造形の関連を視覚言語として作品制作を試みたものである。日常的に私たちは造形表現に関する言葉を使用している。岩がゴツゴツしているとかふんわりとした食パンというような擬態語擬音語の類を使用してコミュニケーションをしている。こうした言葉では造形上の触覚を表すものに特徴がある。そこで本稿では写真を用いて造形要素と視覚言語のなかで触覚に関わるものを主として紹介し教材研究の一部とする。

1　造形要素と視覚言語

美術教育の一つとして造形要素や視覚言語を媒介とする方法がある。それは19世紀初めのバウハウスやロシアアヴァンギャルドのヴフテマスにおいて基礎教育として試行錯誤され、教育方法として定着していった経緯がある。[1)] そしてその後の昭和初期のわが国での構成教育運動や戦後のデザイン教育を主とする造形教育センターなどのいわゆる造形主義的な美術教育の方法となってきたのである。

造形要素は一般に、形態、色彩、テクスチュアーの３つを指し、視覚言語は造形要素の操作による状態を示すもので、具体的には、対比、均衡、運動、方向、リズム、繰り返しなどがある。それらは厳密に固定されたものではなく、その場の環境や造形上のコンテキ

*山口大学大学院教育学研究科修士課程美術教育専修

ストによって成立する場合が多い。そもそも造形要素においても、形態はさらに点、線、面の要素からなるし、色彩には色相、明度、彩度といった三属性からなっているのである。また、テクスチュアーにおいては材質そのものと視覚的な材質感をも含んでいるので限定することは困難である。したがって造形要素は造形的存立用件を満たす物理的な形態や色彩の様態ではあるが、限定されるものではなく、概念として存在するといえる。

概念として存在するからこそ創造的可能性や教育としての可能性があるのである。そしてそこには、言語の介在がある。例えば、有機的な形を説明する場合に、「木のような形」とか「ソフトクリームのような雲」というように具体的な形状を示す言葉によって説明や伝達をおこなう。さらには「ジグザグ」「渦巻き」といった形状そのものを説明する言葉を用いてイメージを伝達することも多い。また、色彩については「あか」「あお」といった概念的な色の名前を用いる場合と慣用色名のように「みかん色」「水色」「茶色」といった具体物に因む色名を用いる場合とが日常的である。また、テクスチュアーを言語で表現する場合には日本語の特質の一つである擬態語を用いることが多い。「つるつる」「がさがさ」「すべすべ」「ぴかぴか」などである。こうした擬態語は日本語ではイメージの伝達に機能的である。さらには擬音語も動きや動作を説明するのに効果的である。

視覚言語による美術教育はややもすれば固定的で画一的になりやすいといった批判的な見解も存在している。それはバウハウスや後のケッペッシュなどが確立した法則的な内容を直接的に教育に導入したことにもよるものである。そこには自然風土、生活環境などの個性や独自性を無視して、人間工学的なインターナショナルスタイルに向かうデザイン教育を強調するあまりに生じた批判であろう。

しかし視覚言語による美術教育には言語の介在と役割が大いに関係しているのである。特に色彩を示す慣用色名や擬態語は日本語の特性があり、言語から受ける造形的イメージの広がりが、日本語以外の文化圏でのイメージとは異なってくると考えられるのである。例えば「しっとり」とか「すべすべ」といった言葉から受ける造形的イメージはmoistという英語にはない潤いを連想させるのである。しかもそうした連想は経験的なイメージと概念的イメージが統合されて個人的イメージではあるが共通理解のできる様態を示すのである。

このように考えるならば、視覚言語による美術教育は母語の介在をともなって、母語のもつ風土や文化を反映することが可能である。日本語による教育や伝達によって日本的な風土や文化を背景とする美術教育の一方法が可能である。

2　触覚感覚と言語の例

シンガポールでは、美術教育の柱の一つを視覚リテラシーとし、それに関するデザインの要素と原理を習得することを重視している。中学一年の教科書『EYE FOR ART』では、第2章に「デザインの要素と原理」という項目がある。ここでは、線、形、形態、色価(トーン)、色彩、材質感、空間といった造形要素と、バランス、調和、対比、リズム、支配、繰り返しの構成の原理を学ぶ。[2] この教科書では造形要素と視覚言語を造形表現の広がりと造形の理解のための手立てとしている。

そこで表現のためのイメージの広がりとして言葉と視覚言語の関連を想定しながら写真を使った教材を作成した。写真を利用した教材は、『身の回りの視覚言語』という題材で

行ったものである。身近なものから造形要素や原理として感じられるものを写真に撮り、それに関連した言語を付与するものである。また逆に言葉を決めておいてそのイメージに合った状況や様態を写真に撮る場合もある。教材例の言語には、「もじゃもじゃ」「つんつん」「ごつごつ」などの日本独自の言語があげられている。ここでは、シンガポールでの教科書で取り上げられている線、形といった造形要素と原理を、教材例であげられた言語に分類、あてはめてみる。

教材例であげられた言語	造形要素	造形の原理
もじゃもじゃ	線	
もこもこ、ほわ、ふわふわ	線、材質感	
ぐにゃ、くねくね、うねうね	線、空間	リズム
にょきにょき	線、形	リズム
とげとげ、つんつん、ちくちく	形、材質感、	繰り返し
ぼこぼこ、ごつごつ	形、材質感	
かさかさ	材質感	
つるつる、つやつや	材質感	
ぎざぎざ	線、形、材質感	繰り返し
もやもや	線、形、材質感、空間	リズム
ざわざわ	材質感、空間	リズム
てんてん	形	リズム、繰り返し
もくもく	形態	リズム
ゆらゆら	形態	リズム
きらきら	材質感	対比
ジグザグ	線	繰り返し
しましま	線	繰り返し
ぐるぐる	線、空間	繰り返し
ぽつん	空間	バランス、支配
ころころ	形	バランス、リズム
ぐーん	線、形、色彩	繰り返し
奥行き	線、空間、色価	繰り返し
四角、正方形	線、形	
まる	線、形、形態	
三角	線、形	
光と陰	線、色価、空間	対比
ドット	線、形	繰り返し
クロス	線、空間	バランス

3　写真による視覚言語の教材例

ここでは写真を利用した視覚言語の理解のための作品について具体的に述べる。

図1「ぐにゃ」

ロープ、草、ホースなどの線状のものが渦を巻いて曲線を描いているところが写し出されている。ここでは、不規則な曲線的要素に「ぐにゃ」を見出しているが、他には固形物が変形しているものなどにも「ぐにゃ」という言葉にふさわしい形状として写している。

図2「もじゃもじゃ」

草が不規則に集まったもの、網が乱雑に置かれたものが写されている。ここでも曲線的要素が見られるが、「ぐにゃ」に比べ曲線が不規則に複数集合したものに「もじゃもじゃ」を見出している。「もじゃもじゃ」には、他に、毛髪、動物の毛などといったものがあげられる。

図2「モコモコ」、図9「ふわふわ」

図2「モコモコ」では、猫の体、毛を写している。柔らかそうな材質感と曲線に「モコモコ」を感じ取っている。同様に、図9「ふわふわ」においても、ファー付きのスリッパ、キーホルダー、ジャケットといった毛皮製品や泡などが写され、柔らかい材質感に見出している。これらから、ほぼ同じ素材から二つの視覚言語を想起していることがわかる。「モコモコ」「ふわふわ」では、他に雲、わたがし、綿などが考えられる。また、逆に「ふわふわ」には、風船、羽毛などといった軽くて柔らかく、浮遊するイメージのものもあげられるが、「モコモコ」には柔らかい材質感を持っているが物質が固定されたイメージがある。

図3、4「つんつん」

鋭い形状の葉、植物の種、枝、実や鉄の片々、有刺鉄線の一部が写されており、短く鋭い形状、針状のものが繰り返されているものに見出している。他には、氷柱、剣山、ウニ、物をつついている様子などがあげられる。

図5「ぐるぐる」

ボルトのネジの部分、絡まったロープ、束ねられたホース、曲線を描いた溝蓋の穴、扇風機の蓋を撮っている。曲線的な要素が繰り返されているもの、特に規則的な曲線を繰り返し描いたものが多く取り上げられている。他には、ハリケーン、駒、メリーゴーランドなどそれ自体が回転しているものなどが考えられる。

図6「ぺら」

張り紙が風でめくれた様子、樹皮が剥がれかけた部分、本のページがめくれた様子が写されている。「ぺら」として、薄いものがめくれた様子、剥がれた様子を取り上げている。

図7「ザー」

川、滝、噴水の一部など、水が流れる様子を撮っている。他には、雨やテレビのザーという雑音、砂や米、砂糖といった粒子状のものが流れ落ちる様子などがあげられる。

図7「ポチャン」

水滴が落ちたときの様子が写し出されており、水の中に小さいものが落ちるときや、液状のものが水滴として落ちるときの様子に「ポチャン」をあてはめている。

図8、17「かさかさ」

図8では、樹皮、鉛筆を鉛筆削りで削っている様子、ドライフラワーが取り上げられ、

図17では、他に枯葉、落ち葉などを撮っている。乾燥したものや、剥がれそうなもの、薄いものが重なり合っている様子などに見出している。

図10「つるつる」

CDの裏面、髪の毛が禿げた頭、車のミラー、ガラスのテーブル、金属製の卵型の置物を撮っており、表面に凹凸がなく滑らかなものや反射するものに「つるつる」を感じている。

図11、12「しましま」

トタン、柵を取り上げ、直線が繰り返している様子に「しましま」を見出している。他に、ゼブラ柄、ボーダーシャツなどが考えられる。縞模様を連想することが容易なので造形物を探しやすい言葉である。

図13「まる」

木の切り口、小石、点字ブロックを撮っている。正確に円を描くものだけでなく、円形に近いものも含まれている。造形要素をそのまま直接的に表現する言葉なのでイメージが広がりやすい。それは正円に限らず円に近いものや円を連想させる形態の一部でもよい。さらには「まる」という言葉から受ける心象的なイメージとして人間の和のようなものも含むことができる。

図14「点」

これはまさに直接的に造形をイメージさせる要素の一つである。陳列された印鑑やチューブ絵の具のふたの部分、チョコレート、オオイヌノフグリ、椿が取り上げられている。円形のものが規則的に並んでいる様子だけでなく、不規則に散らばっている様子も「点」と感じている。また、円形に限らず、そうでないものも、一つ一つの要素がある程度の距離感をもつ集合体であれば同様に感じられる。他には、飛石、星などさまざまに考えられる。

図15「線」

格子状のフェンス、草原に菜の花の黄色が線状に広がった様子、電線、竹の幹の部分を写している。ある要素が一つの方向性をもった形状に「線」を見出している。

図16「ぐんぐん」

竹を下方から見上げたところ、つくしを写しており、植物が成長する様子に「ぐんぐん」を感じている。他にも飛行機雲など、直線的にものがよく伸びていく様子などにも「ぐんぐん」をあてることができる。

図18「もやもや」

水面の揺らぎ、木漏れ日を取り上げている。他にも、霧など不定形で固定化されておらず、ぼんやりとしているものに感じられる。心象的には人間の悩みの表現でもある。

図19「ざわざわ」

植物の葉や花が群生していて微妙な動きを表している様子。微風によって動く様子を一般的にはざわざわという言葉で表現する。また、人々の動きや喋りの状況も同じ言葉で揚言される。

図20「てんてん」

複数の点による表現であるが、不規則な状態で点在しているので言葉では「てんてん」と表現するほうが感覚的な正確さを表すことができる。

以上は教材の一部である。視覚的な形状や様態を示す言葉は直接的なものと間接的なものがある。まる、点、線など形を示す言葉や色名を表すものは直接的である。そして「ほ

かほか」「ぐにゃぐにゃ」などはある程度の共通理解をすることができるが直接に色や形を説明するものではない。さらにはここでは例として出していないが、意味の分かりにくい言葉からの造形的連想も可能であろう。

4　まとめ

美術教育にはいくつかの方法があるが、大別すると教育の理念と関連して教える方法と育む方法とに分かれれる。明治以降の美術教育の変遷や戦後の教育課程の改訂の変遷などを見ると、教える方法を重視した時代と育むことを重視した時代がある。[3] 民間教育運動においても教育理念として教えることと育むことが並存しているといえる。いずれにしても美術表現や鑑賞の手段として言語を通したイメージの介在がある。造形要素と視覚言語はその手段の一つである。

点、線、面といった形状を観念的に表す言葉から、具体的な造形を想像したり探し出したりすることはイメージを豊富にする。色彩についても同様で一つの色の名前から様々な具体物や情景を想像することができる。直接的に造形を示す言葉ではイメージがしやすい。

擬態語や擬音語はイメージがもっと広がりやすい。個人の感覚や経験、思い入れのようなものが作用し解釈の幅が広がるといえる。「ふわふわ」という言葉一つをとってみても具体物を連想するのに綿を連想する場合もあれば食パンを連想する場合もある。また、「ふわふわ」に色彩を連結するともっと多様な広がりをもつであろう。色の感情効果や色相の連想は形状や様態を示すものとは少し異なるが、視覚言語のなかでは色彩の占める位置も大きいのでイメージの想起に重要な要素となる。[4]

さらに造形的なイメージを拡大するためにには複雑な感情を表す言葉によってイメージを想起することもできる。例えば「後ろめたい」とか「えもいわれぬ」というような言語でも説明のしにくい言葉から造形的な想像をする方法である。これは一つの解答を有するものでではないので多くの人間が感じる造形を理解することによってイメージを豊富にすることができる。

日本語は擬態語擬音語の豊富な言語である。日本語を通して造形的なイメージを膨らませることも美術教育の一つの教育方法であり分野でもある。

付記

本稿を作成するに当たり福田が１、４を、山田が２、３を担当した。また、教材の作品は平成15年度教育学部学校教育教員養成課程美術教育選修卒業生、山田晃子、山田光恵、岡部ゆり、加藤治子、中野弘子によるものである。

本研究は平成15年度教育学部研究支援経費によるものである。

注

1　福田隆眞　バウハウスとヴフテマス―基礎教育の意義について―　山口大学教育学部研究論叢第39巻第３部　1990

2　Imants Krumins, “EYE FOR ART Visual Arts for Secondary One”, OXFORD University

Press, 2000　及びImants Krumins, Linda Chee, “THE CREATIVE EYE Visual Arts For Sevondary Two”, OXFORD University Press, 2002

3　福田隆眞　美術教育の方法に関する一考察—自由画教育と構成教育—　教育法方学研究第15巻　1990

4　色と言葉の関連付けとしてトーンや色相から連想する具体物や形容がある。参考としては以下がある。中田、北畠、細野著「デザインの色彩」日本色研事業　1983

参考文献

・ギオルギー・ケペッシュ　グラフィック社編集部訳　「視覚言語」　グラフィック社　1973

・P・トンプソン　P・ダベンポート　「ヴィジュアル・ランゲージ　視覚言語辞典」　マール社　1985

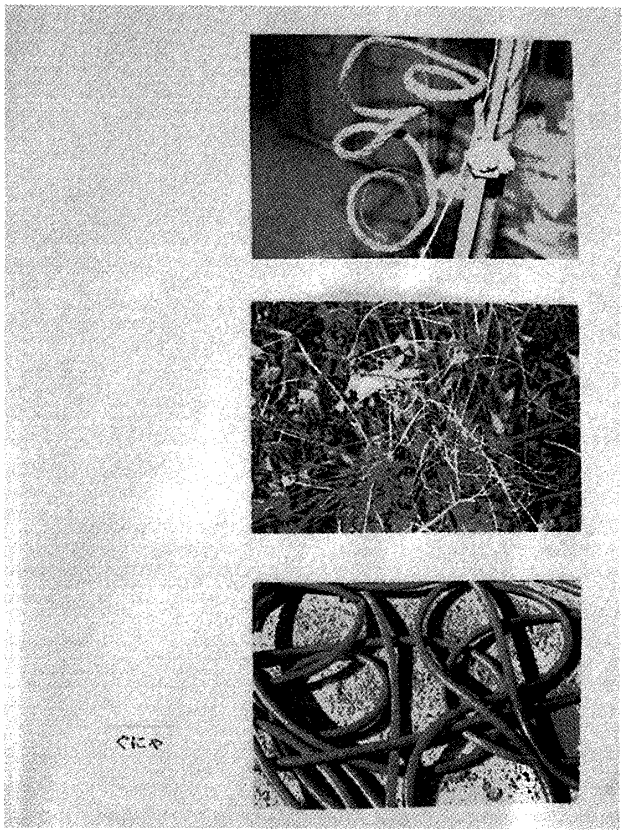


図1「ぐにゃ」

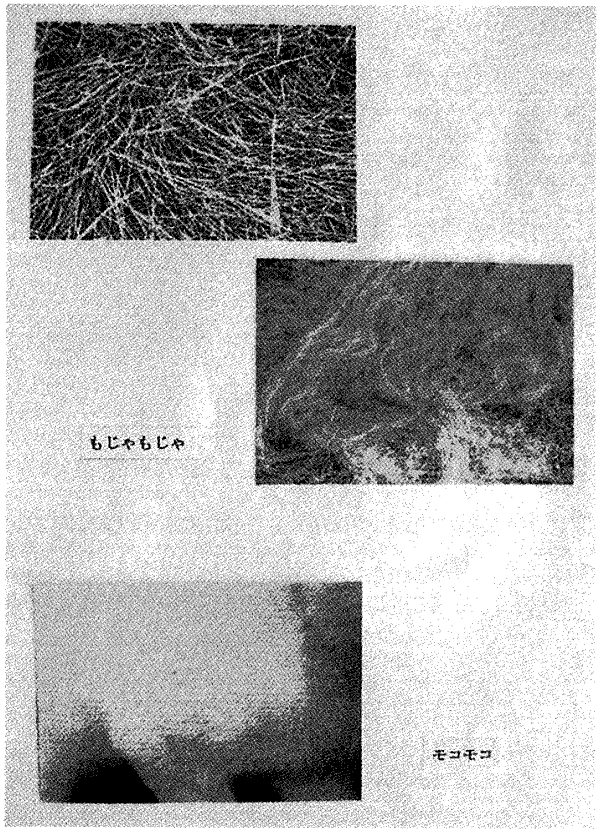
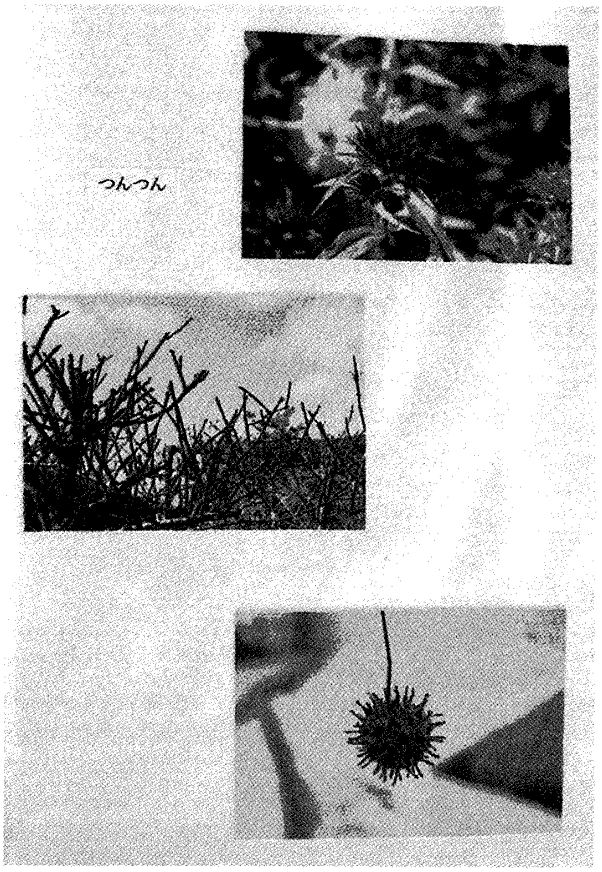


図2「もじゃもじゃ」「もこもこ」



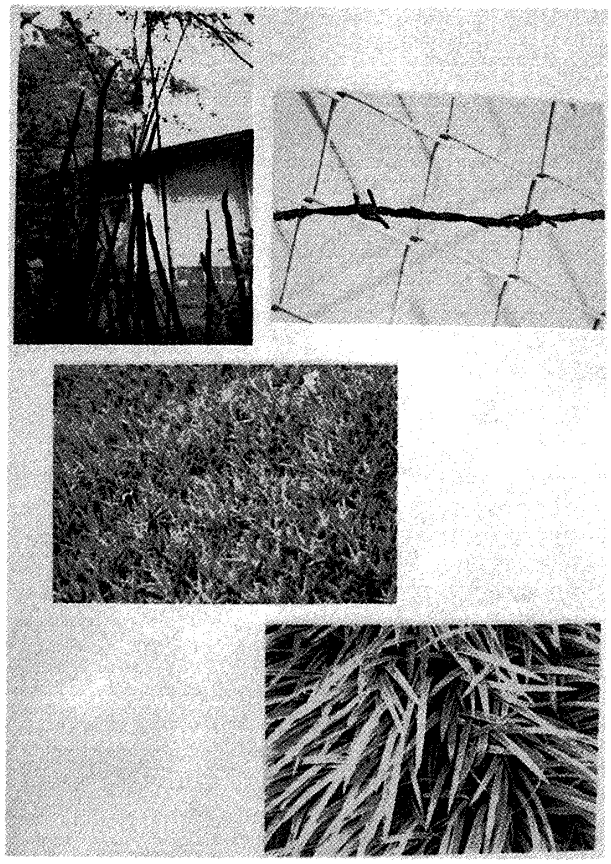


図3、4「つんつん」

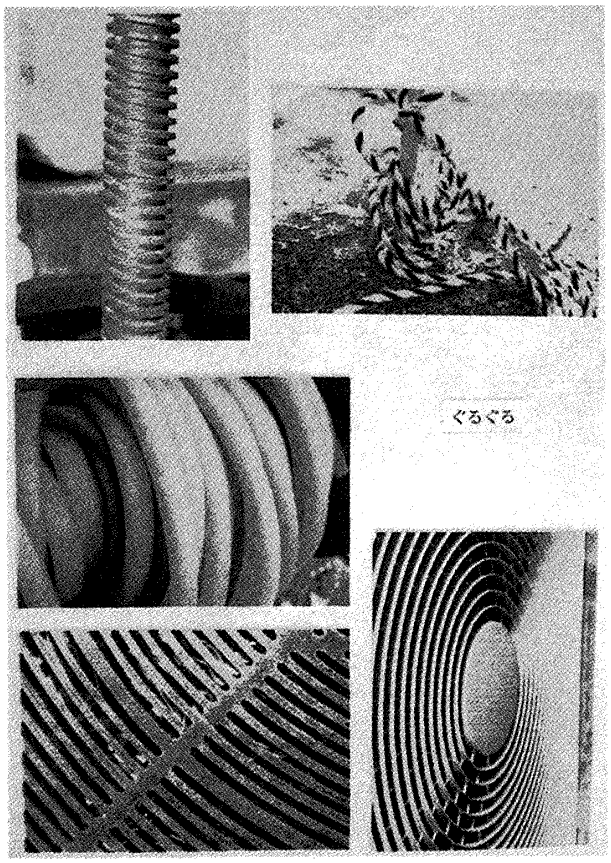


図5「ぐるぐる」

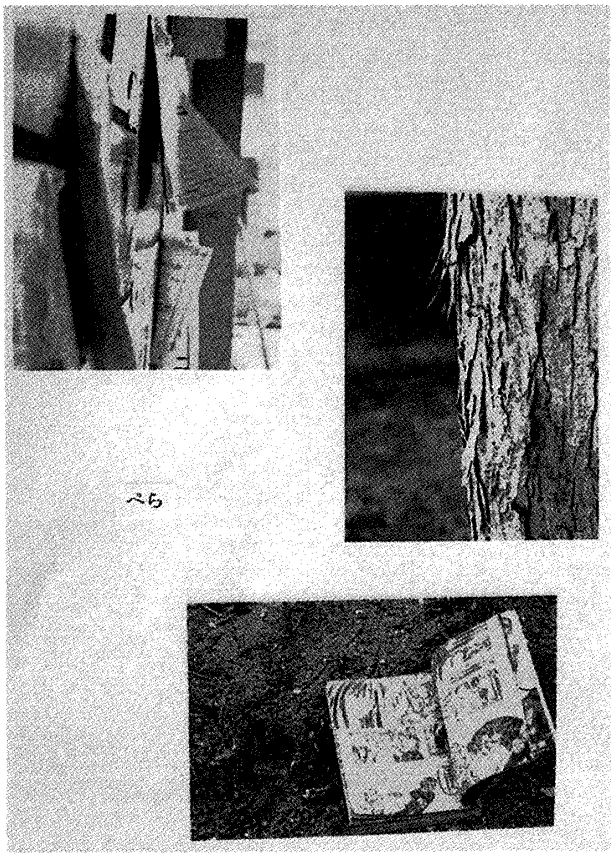


図6「ぺら」

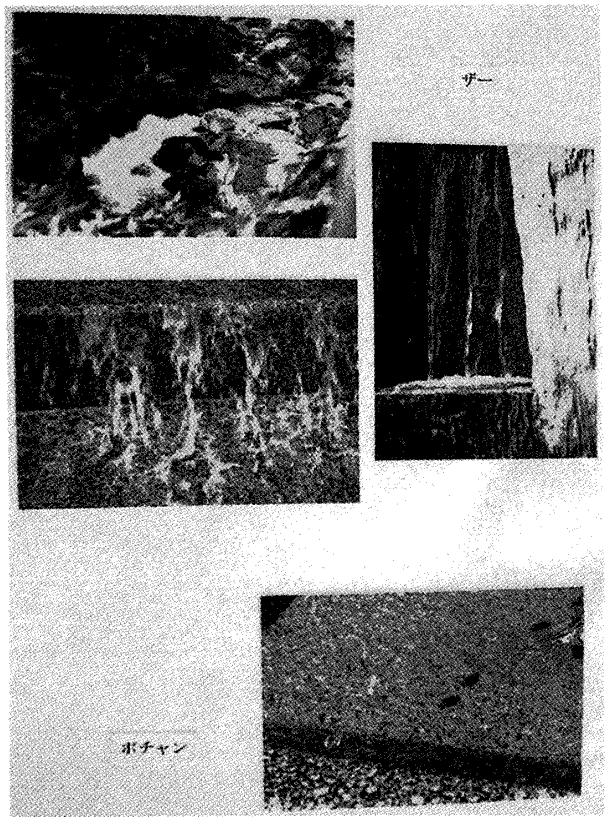


図7「ザー」「ぽちゃん」

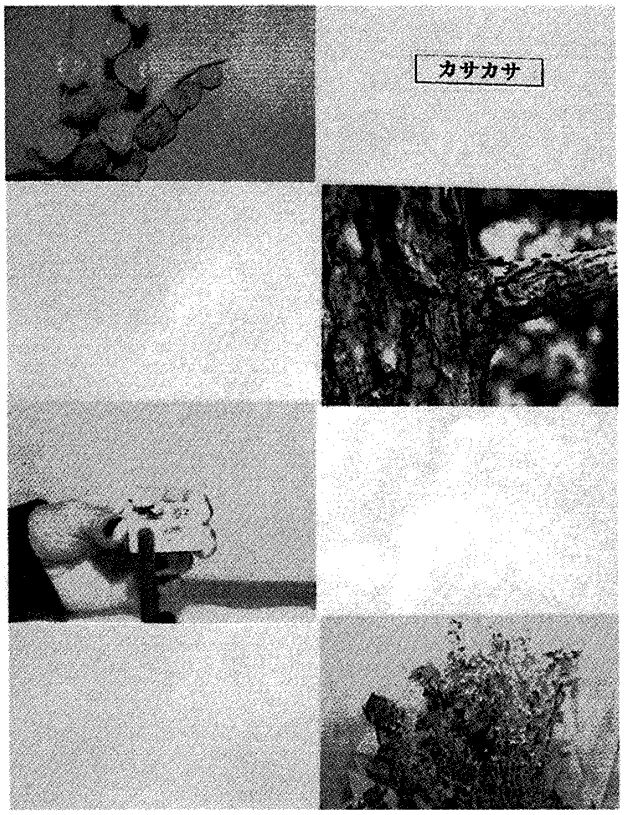


図8「カサカサ」

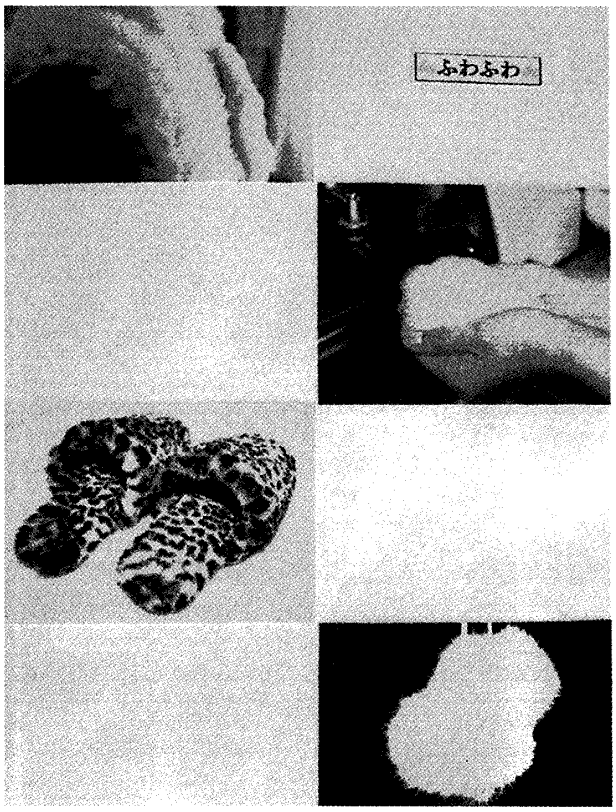


図 9 「ふわふわ」

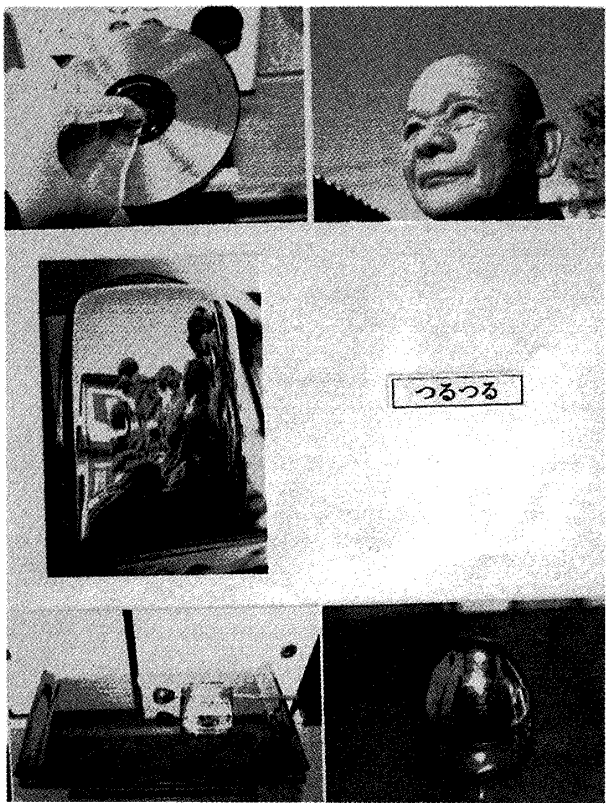
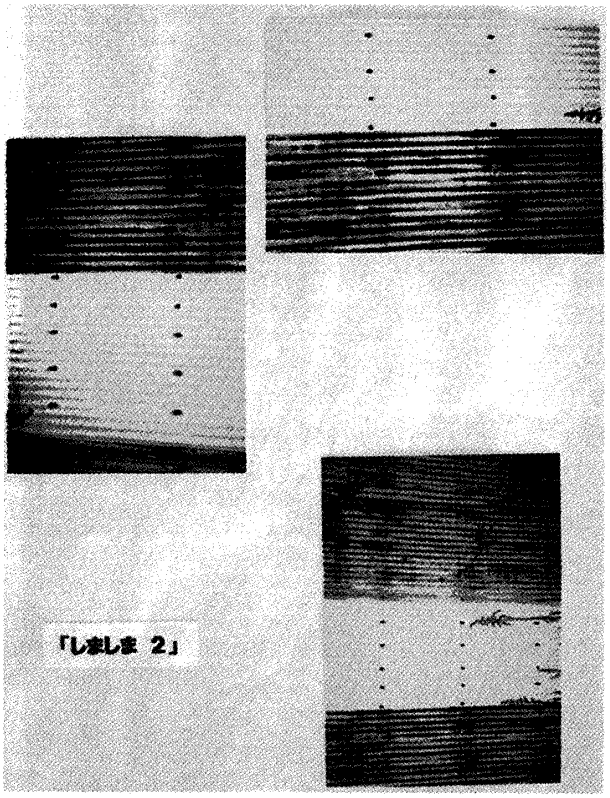


図10「つるつる」



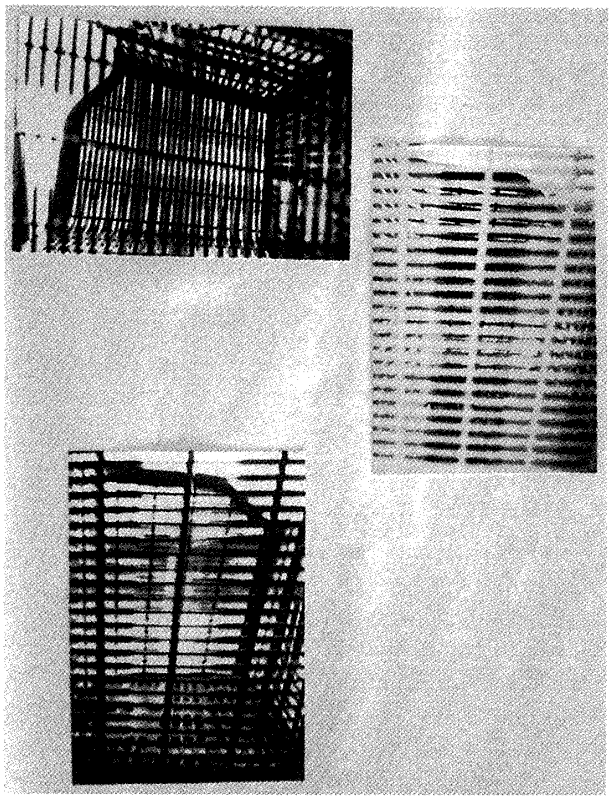


図11、12「しましま」

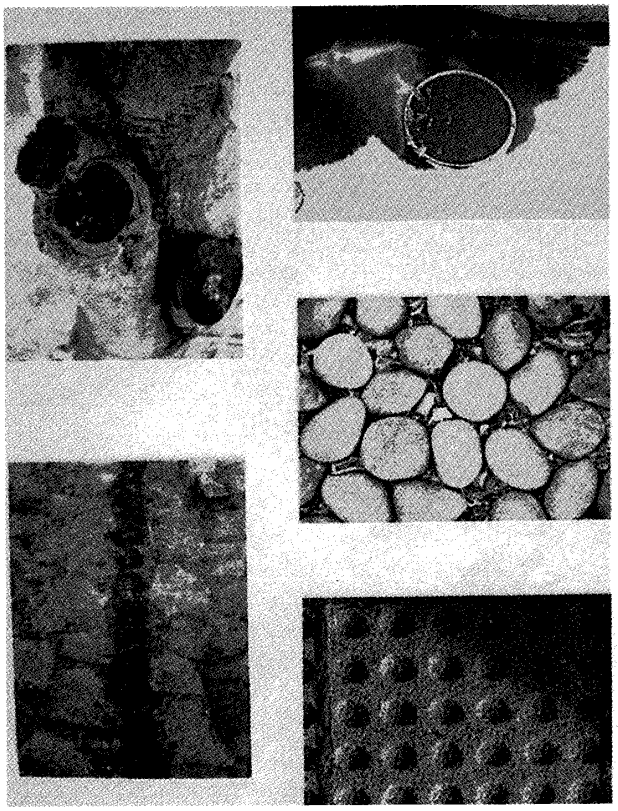


図13「まる」

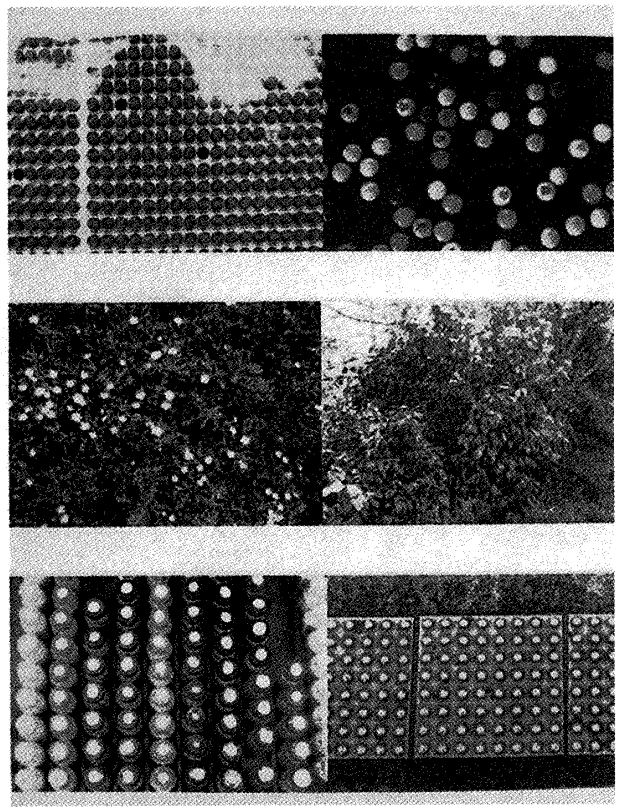


図14「点」

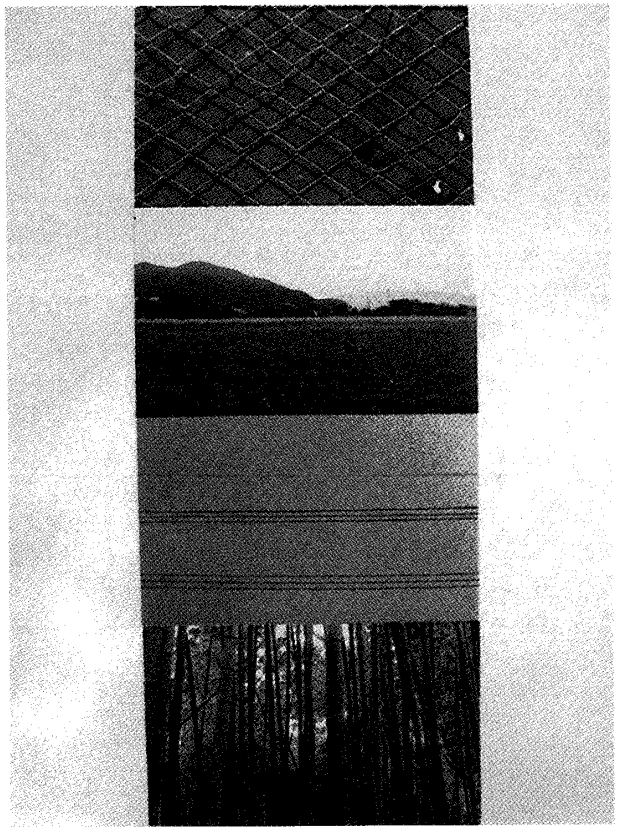


図15「線」

図61「ぐんぐん」

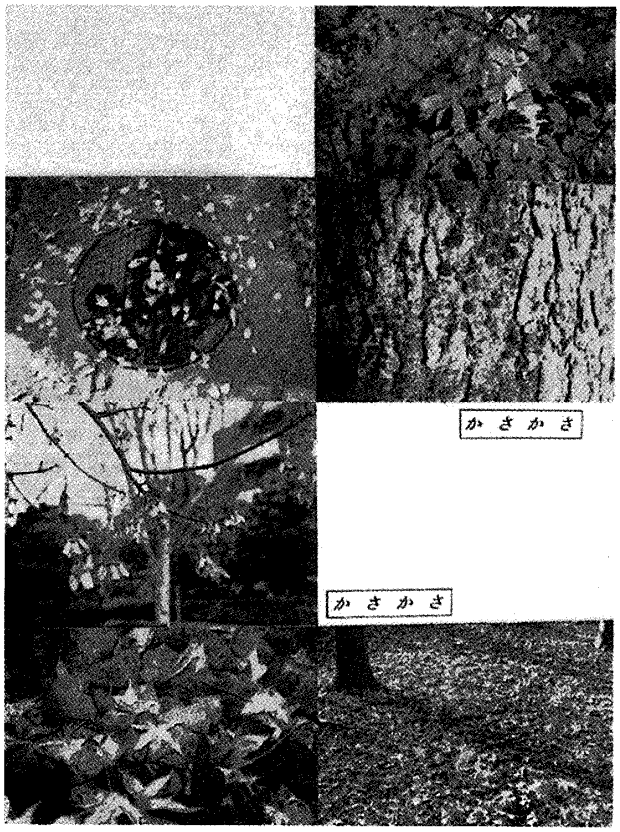


図17「かさかさ」

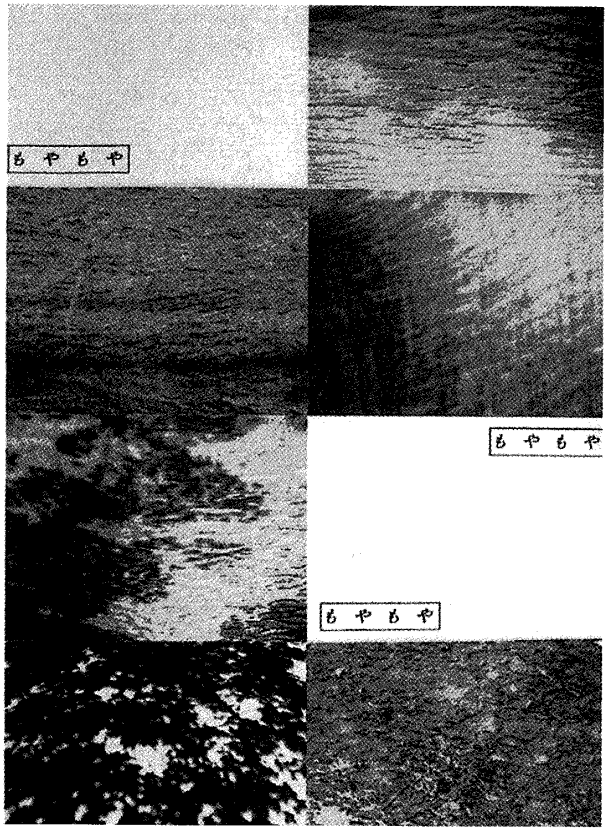


図18「もやもや」

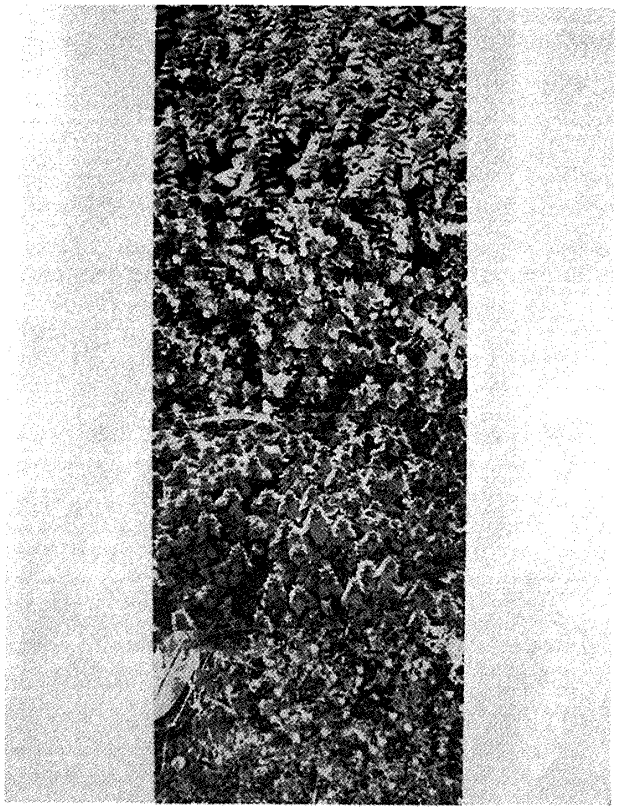


図19「ざわざわ」

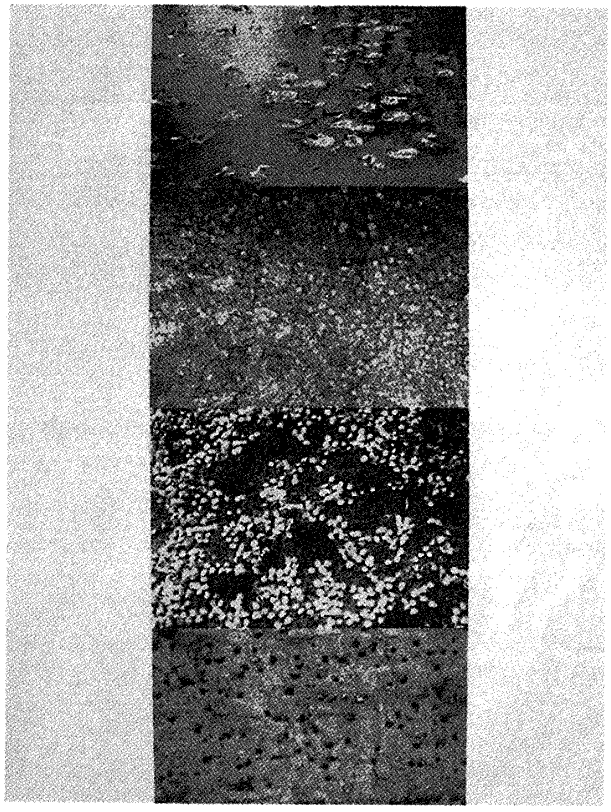


図20「てんてん」